伊 勢 国 府 跡 16

２０１４年３月

鈴鹿市考古博物館

例　言

1　本書は，国庫・県費補助事業として鈴鹿市が 2013（平成 25）年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）第 31 次調査の概要をまとめたものである。

2　発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体　鈴鹿市　（市長　末松則子）

調査指導　八賀　晋（三重大学　名誉教授）
伊藤久嗣（鈴鹿市文化財調査会委員）
川越俊一（独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　名誉研究員）
金田章裕（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　機構長）
和田勝彦（財団法人　文化財虫害研究所　常務理事）
渡辺　寛（皇學館大学　名誉教授）
文化庁文化財部記念物課
三重県教育委員会社会教育・文化財保護課

調査担当　鈴鹿市　文化振興部　考古博物館

組織及び構成

鈴鹿市考古博物館長	兼丸まり子
主幹兼埋蔵文化財グループリーダー	藤原秀樹
埋蔵文財グループ副主幹	服部真佳
副主査	田部剛士・吉田隆史
事務員	米川梨香
嘱託	吉田真由美・小川陽子

3　発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。

〔第 31 次〕鈴鹿市広瀬町字丸内 2600 番 1　面積 140㎡　平成 26 年 1 月 22 日～平成 26 年 3 月 13 日

4　現地調査及び本書の編集・執筆は藤原が担当した。

5　調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕小河清角・勝野春男・野口省三・中川征次・吉岡健次・前川義輝

〔屋内整理〕永戸久美子・加藤利恵・横内江里

6　Fig.1 では国土地理院 20 万分の 1 地勢図「名古屋」の一部を，Fig.2 では国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」・「亀山」の一部を使用した。

7　座標は過去の調査との整合性を保つため，日本測地系第Ⅵ系を用いている。なお，図中の方位は座標北を示す。

8　本調査に係る図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

9　調査及び報告書刊行にあたっては上記指導委員の他に，地権者並びに地元各位をはじめ，下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）
朝倉忠久・竹内英明・川辺浩司・石井智大・河北秀実・三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館・亀山市教育委員会・広瀬町自治会・広瀬町能褒野自治会・西冨田町自治会・中冨田町の山自治会・中冨田町の町自治会

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の位置とこれまでの調査成果 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅲ　基本層序 …… 5
Ⅳ　調査の経過 …… 5
Ⅴ　調査の成果 …… 7
Ⅵ　まとめ …… 7

表　目　次

Tab.1　調査履歴 …… 4
Tab.2　報告書抄録 …… 10

挿　図　目　次

Fig.1　周囲の主な寺院・官衙関連遺跡 …… ii
Fig.2　位置と周辺の遺跡 …… 2
Fig.3　調査区位置図 …… 3
Fig.4　方格地割北部平面図 …… 5
Fig.5　調査区平面図 …… 6
Fig.6　遺構平面・断面図 …… 7
Fig.7　国庁及び関連施設の模式図 …… 8

写真図版目次

Plate 1 …… 9

Fig.1　周囲の主な寺院・官衙関連遺跡　1：200,000
（国土地理院 20 万分の 1 地勢図「名古屋」を使用）

Ⅰ　遺跡の位置とこれまでの経緯

長者屋敷遺跡は鈴鹿市広瀬町・西冨田町及び亀山市田村町・能褒野町にわたり分布する。鈴鹿川の支流である安楽川左岸に位置する。遺跡が立地する標高約 50m の台地は水沢扇状地の中期面に相当し，台地南面に広がる谷底平野との比高差は約 20m である。

鈴鹿市域における当遺跡一帯は農業振興地域であり，水田や茶・サツキ・芝・果樹など付加価値の高い作物の生産が盛んで，全体に田園風景が広がる。これに対し亀山市側は市境まで住宅地・工業地帯化が進んできている。

当遺跡を含む鈴鹿川流域には古来東西交通の要衝として多くの遺跡が残され，古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる（Fig.1）。伊勢国内における古代東海道の痕跡は十分明らかにされていないが，延喜式に知られる鈴鹿・河曲・朝明・榎撫の各駅家を経由して尾張国に至る経路のうち，鈴鹿・河曲の両駅が鈴鹿川流域に位置することは疑いない。史跡伊勢国府跡の西約 10km には鈴鹿関跡が，東北東約 7km には史跡伊勢国分寺跡があり，三者を結ぶ直線的な経路は駅路想定の基準の一つと考えられる。有力な国府推定地である鈴鹿市国府町は長者屋敷遺跡から南南東へ約 3.5km に位置する。国府町と史跡伊勢国分寺跡を直線的に結んだ中間地点に所在する平田遺跡では幅 9m の道路遺構が両者を直線的に結ぶ角度で検出されている（林 2006）。

さて，長者屋敷遺跡は古くから夥しい瓦の散布がみられ，土壇や土祭木の高まりの点在から地元には「矢下（卸）長者」の伝承が残っている。昭和 32 年，京都大学の藤岡謙二郎を中心とした伊勢国府跡学術調査団が，同遺跡の存在に注目して測量や一部の発掘調査を行い，礎石建物の存在を明らかにした（藤岡ほか 1957）。国府町に古代伊勢国府の方八町域を想定していた藤岡は当遺跡が初期国府である可能性を示唆しながらも，鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した。

その後はしばらく調査の対象となることはなかったが，各地で官衙遺跡の確認・調査が相次ぎ，徐々に長者屋敷遺跡への関心は高まりをみせた。このことから平成 4 年度から鈴鹿市教育委員会が学術調査に着手し（浅尾 1993），現在まで調査を継続している。平成 5 年度には史跡近江国府跡と極めて類似した構造の政庁跡が確認されて（新田 1994・辻 1996），長者屋敷遺跡が奈良時代の伊勢国府跡であるとの評価が確定した。平成 7 年度までに政庁の中心的な施設の規模や構造が確認されている。また，「西院」と呼ぶ付帯区画の存在も確認された。

平成 8 年度以降，政庁の北方に所在する瓦集中散布地点の南野南地区や長塚南西地区において礎石建物群が発見される一方（新田 1999 ほか），平成 7 年には三重県埋蔵文化財センターによって実施された緊急調査の結果（宇河 1996），方格地割の存在が提唱されるようになった。

同センターで調査を担当した宇河雅之は，国庁域を含む南北 6 区画・東西 5 区画の方格地割を想定し，北端に位置する基壇状の高まり「金藪」を平城宮に対する松林苑に相当するものと提唱した（宇河 1997）。これ以降，鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市の調査の方針は方格地割の性格と範囲の確認が主となっている。

方格地割については，これまでの調査で少なくとも東西 4 区画，南北 3 区画の地割が確実に存在することが明らかになってきた（吉田 2003 ほか）。しかし，地割は国府政庁には接しておらず，政庁と方格地割の関係をどのように理解すべきかが課題となっていた。その中，「金藪」南側の調査によって，幅 24 m の南北大路が確認され，金藪と政庁の中軸と一致することが確認され，少なくとも三者が一連の計画によって建設されていることが確認されている（田部 2007）。

これとは別に，平成 14 年ごろ政庁の南方台地において高規格道路「鈴鹿・亀山道路」建設の計画が持ち上がり，広範囲において範囲確認調査が実施された（吉田 2003・2004 ①）。政庁南方には南に向かって広大な平坦地が広がるにもかかわらず，国府に関連するような区画施設や建物群はほとんど確認されなかった。この点でも長者屋敷遺跡の国府跡としての独自性が認められる。

これまでの継続的な調査の成果を受け，国庁周辺および方格地割のうち建物跡群が確認された方格地割の 2 地区を合わせた 73,940㎡が，平成 14 年 3 月 19 日に伊勢国府跡として国の史跡に指定されている。

Ⅱ　調査に至る経緯

現在は，史跡の追加指定を前提として方格地割の範囲を確定するための調査を継続中で，北辺を中心に調査が進めている。

平成 22 年度の第 28 次調査では金藪北方の南北中軸線上には大路的な遺構は全く確認できなかった（新田 2011）。金藪付近では平成 20 年度の第 25 次調査において東隣接地が調査され，幅約 4.5m の東西溝 SD310 が検出された（田部 2009）。溝 SD310 は金藪から東北東に約 200 m離れた地点での第 17 次調査（吉田 2004 ②）で検出された東西大溝 SD215 の西延長線上に位置することが判明した。直接に続くわけではないが，このライン

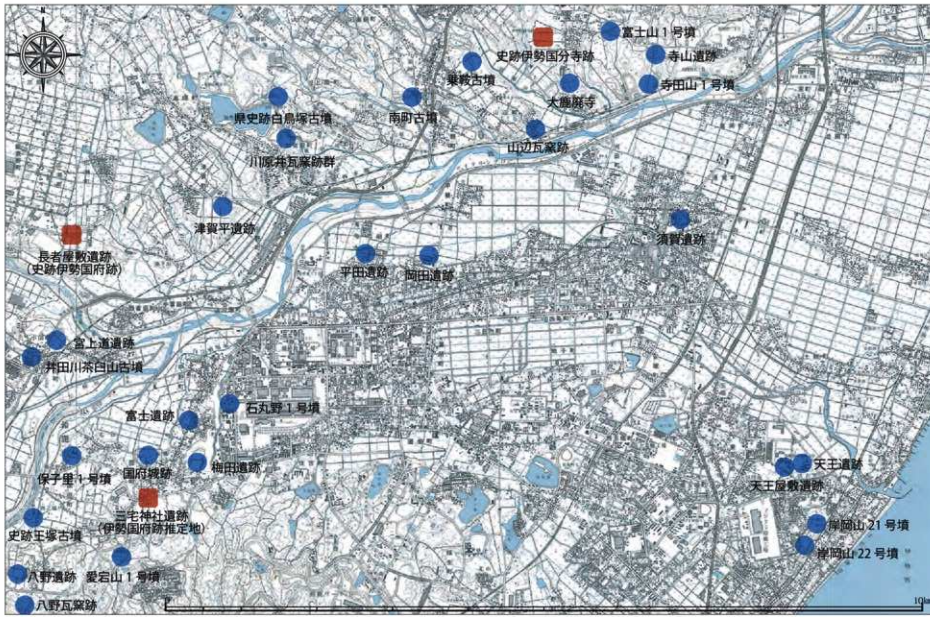

Fig.2　位置と周辺の遺跡　1：50,000
（国土地理院２万５千分の１地形図「鈴鹿」「亀山」を使用）

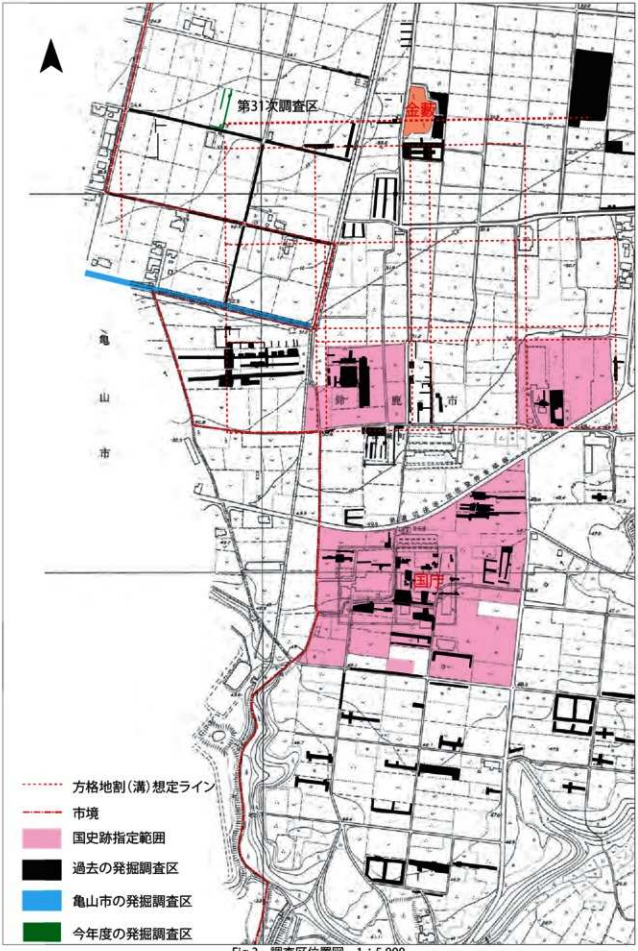

Fig.3　調査区位置図　1：5,000

Tab.1　調査履歴

次数	調査年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積（㎡）	調査原因	概要
プレ1次	1957	A地点	広瀬町字南野			学術	礎石建物
		B地点	広瀬町字矢下				基壇
1次	1992	長塚1	広瀬町字長塚1247,1248	921110～930129	110	学術	鍛冶遺構
		南野1	広瀬町字南野971		115		礎石建物
		荒子1	広瀬町字荒子981		110		五層・溝
2次	1993	6AHI-F、6AJA-Aほか	広瀬町字仲起1226・矢下1134ほか	931129～940228	238	学術	政庁後殿・東隅楼・軒廊・東内溝・東外溝・西外溝
3次	1994	6AJA-Jほか	広瀬町字矢下1131～1133	941006～941227	750	学術	政庁正殿・西脇殿・西軒廊・西内溝・西外溝
3-2次	1994	県調査区	広瀬町字中上居、亀山市能褒野町字中上居	940601～940817	2,700	県緊急	溝
4次	1995	6AJA-A	広瀬町字矢下・荒子・仲起	950920～951219	254	学術	政庁後殿・北外溝・西内溝・西廊楼
4-2次	1995	県調査区	広瀬町字中上居、亀山市能褒野町字中上居	950605～950713	1,600	県緊急	溝
5次	1996		広瀬町字丸内	960620～960716	133	市緊急	竪穴住居・溝
6次	1996		広瀬町字矢下	960625～960719	288	市緊急	溝
7次	1996	6AGE-A	広瀬町字南野972,972-1,972-2,973	961007～970121	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝
8次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚1279-2	971016～980210	632	学術	側壁長・礎石建物・溝
9次	1997	A地区	広瀬町字矢下	980223～980320	21	市緊急	政庁南辺部
		B地区	広瀬町字矢下		26		政庁西脇殿
		C地区	広瀬町字仲起		5		溝
10次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚1279-3,1279-5	980901～981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑
11次	1999	6AJA-Hほか	広瀬町字矢下1176ほか	990901～000131	863	学術	溝・礎石建物・南門
12次	2000	6AHI-CFほか	広瀬町字中起・荒子	001001～010311	1,142.8	学術	掘立柱建物・竪穴住居・溝
13次	2001	6AHD-ABほか	広瀬町字中起1237,1240-1～3,1241	010920～020214	714.2	学術	溝・土坑
14次	2001	6AEC-AB	広瀬町字中上居1282-1	020106～020111	246	市緊急	礎石建物・溝
15次	2002	6AJJ-Dほか	広瀬町字矢下1154ほか	020424～020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古墳・土壙墓
16次	2002	6AJF-Bほか	広瀬町字矢下、西冨田町字東起・矢卸	020620～020925	3,463.4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器棺墓・古墳周溝・方形周溝墓
17次	2002	6ADB－A～E	広瀬町字西野3300	020806～021130	4,640	市緊急	掘立柱建物・溝・竪穴住居
18-1次	2003	6AJC-F	広瀬町字矢下1126	030417～030630	243	学術	溝
		6AJD-E	広瀬町字矢下1144	030421～030630	267		溝
		6ALE-A	西冨田町字矢卸1015－17	030528～030630	21		なし
		6ALE-B	西冨田町字矢卸1015－17	030528～030630	11		なし
		6ALC-G	西冨田町字矢卸1015～15・16	030528～030630	48		なし
18-2次	2003	6AEA-A	広瀬町字中上居1283-2	030902～	360		溝・土坑
19次	2004	6AAD-A	広瀬町字丸内2609-1	040831～041118	220	学術	溝
		6AFA-A	広瀬町字中上居1290-1	040913～041118	200		なし
		6ABB-A	広瀬町字長塚1275	040928～041118	550		竪穴住居
20次	2005	6AAD-B	広瀬町字丸内2606-1,2607-1,2608-1	050822～051130	200	学術	溝
		6AGF-A	広瀬町南野945-6	051011～051130	140		溝
21次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野3242	060719～060908	500	学術	溝・土坑
22次	2007	6A D C A	広瀬町字西野3311	071001～071206	326	学術	風倒木・ピット
23次	2007	—	亀山市			亀山市緊急	溝
24次	2008	6AEB-C	広瀬町字中上居1282-2	080616～080717	835	市緊急	溝・渡是坑多数
25次	2008	6ACA-A・B	広瀬町字西野3243番3248番	081001～081226	690	学術	溝・鍛冶遺構
26次	2008	6ADC-B	広瀬町字西野3313の一部	081218～081226	55	学術	溝・土坑・風倒木
27次	2009	6AFF-A	広瀬町字長塚1244番	090817～091216	580	学術	溝（道路跡）・ピット・風倒木
28次	2010	6ABA-B	広瀬町中上居1305番1	101101～110131	59	学術	なし（風倒木のみ）
29次	2011	6ABA-C	広瀬町中上居1299番1	111201～120229	116	学術	溝
30次	2012	6AAE-A	広瀬町字丸内2612番1	121201～130228	81	学術	なし
31次	2013	6AAC-D	広瀬町字丸内2600番1	140122～140314	140	学術	ピット
				これまでの調査面積	26,471.7		

がなんらかの関係を有することは疑いない。さらに，平成23年度の第29次調査では金敷の西隣接地にも調査区を設け，SD310に対応する SD328が検出された（新田2012）。この北限大溝と仮称される SD215・310・328と金敷で構成される東西ラインが国府関連遺構の北限であることは間違いないと考えられる。

平成24年度の30次調査では，南北3列の方格地割のうち，北1列の西限に想定される丸内南西地区（Fig.7）の北辺を確認したが，溝等の遺構は確認されず方格地割の存在を裏付ける情報は得られなかった（新田2013）。

昨年度の調査指導においては①三重県SD13の確実性の検証（Fig.4 橙丸部分）と②第30次調査区と第19・29次調査との間で北辺大溝（Fig.4 赤点線）の有無を再度確認する必要性が指摘された。

上記の指導を受け今年度の調査地の選定を行ったが①については地権者とのコンタクトが取れず断念せざるを

得なかった。

②については，丸内南東地区の北西コーナー部つまり三重県調査区 SD12 と SD2・11 の交点に当たる地点を調査することで，方格地割の西への広がりについて決着をつけるべく，該当部分（Fig.4 青丸部分）の地権者と交渉に望んだが，この地点はよく整備された育成中の芝生畑であることから同意を得ることはできなかった。

調査地の再選定を余儀なくされていたところ，たまたま今まで同様に芝生畑であり調査の同意が得られなかった北側隣接地において地権者の交代があり，芝生が片付けられて調査が可能になるという情報を得た。

この地点は，第 17 次調査区と金藪（方格地割 - 政庁中軸線）を軸にほぼ対象の位置にあたる。第 30 次調査でも確認を試みた北限大溝の延長を確認するには絶好の場所である。また，第 20 次調査の成果における SD264 と三重県 SD1 の関係からみて可能性としては低いとみられるが，丸内南東地区の西辺溝にあたる三重県 SD12 が方格地割北西端から北に延長するか否か（Fig.4 赤丸部分）もまた確認することにもなるので，この場所 6AAC-D 地区を今回の調査対象とすることに決定した。

Ⅲ　基本層序

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　耕作土：黒色土（通称クロボク）

Ⅱ層　黄褐色砂質シルト層。いわゆる地山と呼ばれる基盤層。10 ～ 30mm の青色，黄白色礫を含む。

今回の調査地は芝を生産していた畑地で，非常に平坦に整地されていた。Ⅰ層の耕作土 0.2 ～ 0.3 m を～除去すると直ちにⅡ層が現れる。Ⅱ層上面はほぼ平坦だが，2 トレンチ中央などでは，黒褐色の漸移層的な範囲も見られ，旧地表は若干の凹凸があったことを窺わせる。また，Ⅱ層上面には，整地及び耕作に伴う幅 0.1 ～ 0.2m の細い黒色土の溝状攪乱が格子状にみられる。このⅡ層上面において遺構確認を行った。

Ⅳ　調査の経過

現地調査には平成 26 年 1 月 22 日に着手し，平成 26 年 3 月 13 日に完了した。調査の経過は以下の調査日誌抄のとおりである。

【調査日誌抄】

1 月 22 日　調査区設定。トレンチ 1，トレンチ 2 掘削。トレンチ 1 遺構見当たらず。

1 月 23 日　トレンチ 2 掘削継続。トレンチ 3 設定，掘削開始。トレンチ 2 北側でピット状の落ち込

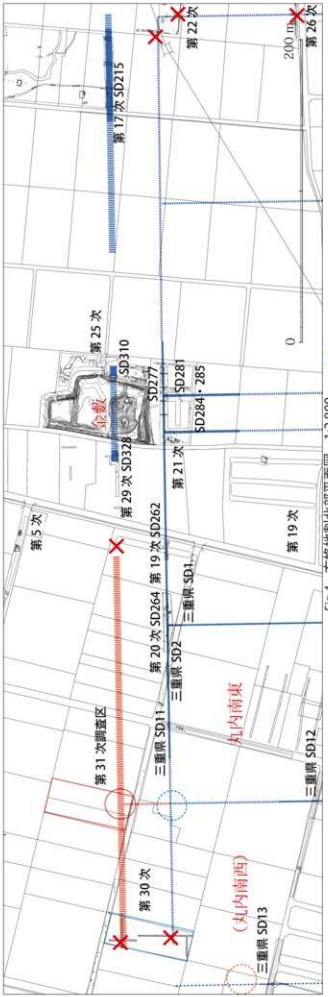

Fig.4　方格地割北部平面図

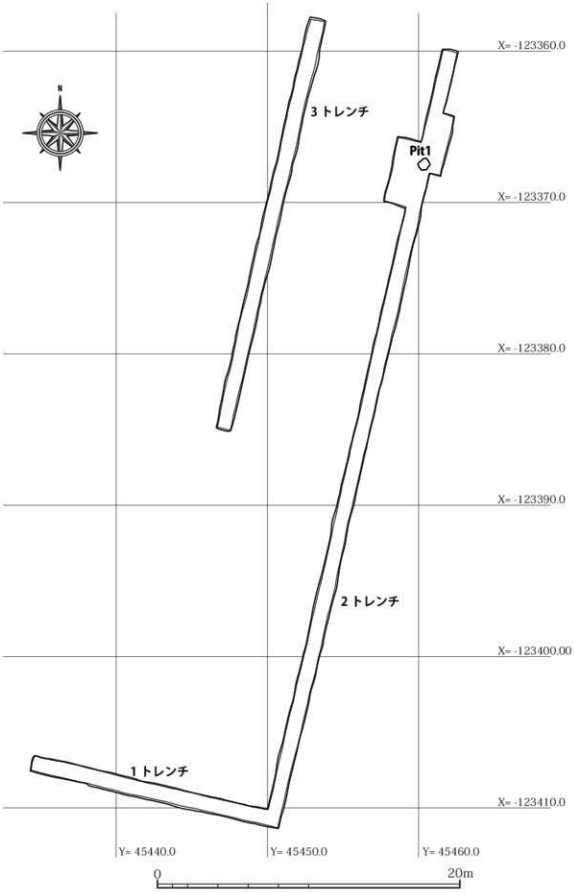

Fig.5　調査区平面図　1：250

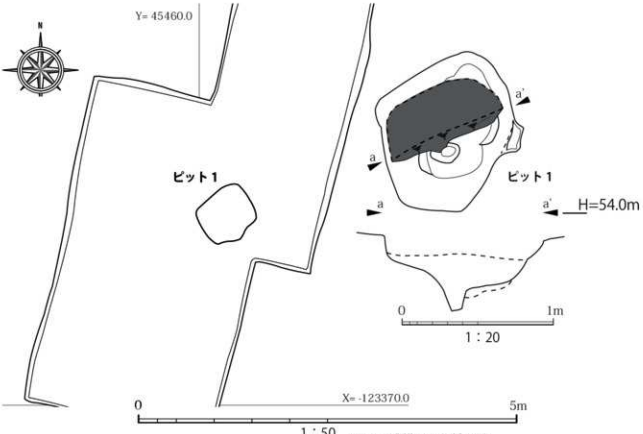

Fig.6　遺構平面・断面図

みを確認，周辺を拡幅して遺構検出を進める。

1月24日　トレンチ3掘削完了，遺構なし。トレンチ2の拡幅完了するも，新たなピット見つからず。午前中で掘削作業完了。シートで養生を行う。

2月18日　基準点測量

2月21日　1・3トレンチの実測

2月22日　2トレンチの実測

2月24日　検出したピットの精査。写真撮影・実測

2月27日　調査指導委員会開催

3月　6日　シート等撤収

3月　7日　清掃・写真撮影

3月13日　重機により埋め戻し

Ⅴ　調査結果

調査対象地に幅1mのトレンチを設け，Ⅱ層上面において遺構検出を試みた。方格地割西辺列に関わる南北溝の検出を目的としてトレンチ1を設定し，金蔵東西における東西方向の溝SD215・312・315，いわゆる北限大溝の延長線上にトレンチ2を設けた。さらに，竪穴住居・掘立柱建物等の有無確認を目的として，2トレンチに並行するよう，3トレンチを設定した（Fig.5）。

遺構確認面は耕作用機器による黒色土の詰まった細溝状の攪乱が格子状に残るものの良好であった。1及び3トレンチでは遺構・遺物ともに全く検出されなかった。2トレンチでは北端から約7mの地点でピットが確認された。これが掘立柱建物の柱穴であることを想定して周囲のトレンチ幅を1～0.5m拡張して検出を試みたが，建物を構成するような新たな柱穴の検出には至らなかった。2トレンチからも遺物の出土は無かった。

ピット1　（Fig.6）

主軸を北東-南西方向に振る。検出時の掘方は0.7m×0.6mの隅丸長方形である。埋土は褐色土ブロック交じりの黒褐色土である。一段下げ掘りおよび半裁したが，埋土にはしまりが無く，底面も中央に向かって狭まり，不整形であった。結局，樹木の根を掘り取った痕等の新しい時期の攪乱であると判断した。

Ⅵ　まとめ

今回の調査によっても「北限大溝」に相当する溝は確認されなかった。金蔵西側においては第29次SD328部分で途絶えて，さらに西側には敷設されなかったと考えられる。

課題となっている丸内南西区画の有無について結論を出すには，先に述べたとおり三重県SD13が本当に直線的で区画溝的な性格を持つか否かの確認が急務である。

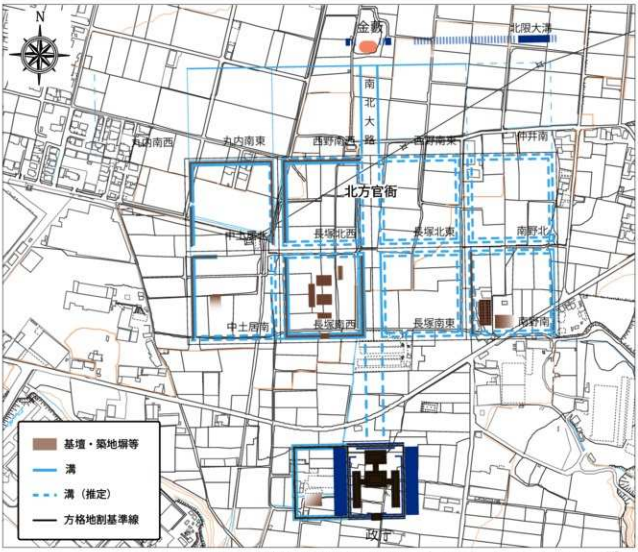

Fig.7　国庁及び関連施設の模式図

【参考文献】

浅尾悟 1993『伊勢国分寺跡（5 次）長者屋敷遺跡（1 次）』鈴鹿市教育委員会

宇河雅之 1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中冨田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター

宇河雅之 1997「伊勢国府の方格地割」『研究紀要』第 6 号，三重県埋蔵文化財センター

田部剛士 2007『伊勢国府跡 9』鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2009『伊勢国府跡 11』鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2010『伊勢国府跡 12』鈴鹿市考古博物館

田部剛士 2011『伊勢国府跡 13』鈴鹿市考古博物館

辻公則 1996「国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～」『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ，鈴鹿市教育委員会

新田剛 1994『伊勢国分寺・国府跡－長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』鈴鹿市教育委員会

新田剛 1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会

新田剛 2001『伊勢国府跡 3』鈴鹿市教育委員会

新田剛 2012『伊勢国府跡 14』鈴鹿市考古博物館

新田剛 2013『伊勢国府跡 15』鈴鹿市考古博物館

林和範 2006「平田遺跡（5 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 7 号

藤岡謙二郎・西村睦男 1957「歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群－軍團阯の問題と附近の開發をめぐって－」『史迹と美術』第 279 号

水橋公恵 2005『伊勢国府跡 7』鈴鹿市考古博物館

吉田真由美 2003『伊勢国府跡 5』鈴鹿市教育委員会

吉田真由美 2004 ①「伊勢国府（16 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 5 号

吉田真由美 2004 ②「伊勢国府（17 次）」『鈴鹿市考古博物館年報』第 5 号

Plate 1

1　調査前全景　南西から

2　調査区全景　南東から

3　1トレンチ　西から

4　2トレンチ　北から

5　2トレンチ　ピット1検出　北東から

6　2トレンチ　ピット1付近拡張　南から

7　ピット1　北西から

8　3トレンチ　南から

Tab.2

報 告 書 抄 録

ふりがな	いせこくふあとじゅうろく
書　　名	伊勢国府跡　16
副 書 名	
シリーズ名	伊勢国府跡
シリーズ番号	16
編著者名	藤原　秀樹
編集機関	鈴鹿市　文化振興部　考古博物館
所 在 地	〒513-0013　三重県鈴鹿市国分町 224 番地　TEL 059（374）1994
発行年月日	2014 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
長者屋敷遺跡	鈴鹿市広瀬町 字丸内 2600 番 1	24207	363	34° 53′ 24″	136° 29′ 39″	2014 年 1 月 22 日 ～ 2014 年 3 月 13 日	140㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長者屋敷遺跡 第 31 次 （6AAC-D）	官衙	奈良・平安	ピット	なし	北限大溝は「金敷」の西方には施工されなかったとみられる。

伊 勢 国 府 跡　16

発行日　２０１４年３月３１日
編集・発行　鈴鹿市
鈴鹿市考古博物館
〒５１３－００１３
三重県鈴鹿市国分町２２４番地
TEL　０５９（３７４）１９９４
FAX　０５９（３７４）０９８６
E-mail：kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
URL：http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/
印刷　株式会社三ツ星

Ise Kokuhu Site

Preliminary Report No.16

March, 2014

Suzuka Municipal Museum of Archaeology